Osaka University Knowledge Archive

Title	『狭衣物語』出典未詳表現覚書 ： 「こゑの秋のかせは月みつことしきりなり」を取りあげて
Author(s)	小林, 理正
Citation	詞林. 2021, 69, p. 39-48
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/83605
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

https://doi.org/10.18910/79222　　詞林　第69号　2021年４月

『狭衣物語』出典未詳表現覚書

――「こゑの秋のかせは月みつことしきりなり」を取りあげて――

小林　理正

一、はじめに

『狭衣物語』の本文は激しく揺れ動く。それゆえ、その様相の把握は困難を極める。本文理解もまた、おびただしいヴァリアントのために一筋縄ではいかない。この状況はもはや贅言するまでもない。本稿で取りあげようと思うのは、『狭衣物語』にいくつか残される出典未詳表現である。特に『狭衣物語』巻三にみえる「こゑの秋のかせは月みつことしきりなり」について検討する。当該表現は、古注釈書および通行する注釈書のいずれもが、その出典を未詳としている。[1] 実際、出典となる作品・資料が散逸しており、断片的にすら目にすることができないならば、出典未詳とする理解も致し方ない。しかし、出典未詳とする見解が示されて以来、充分な検討が積み重ねられることはなく、出来合いの研究成果が安易に継承されてきたきらいがあるように思うのである。

たとえば上原作和らによって平安後期物語の漢籍を引用した表現が再検討および整理されたが、[2] これは通行する注釈書の見解を一論稿にまとめたに過ぎず、従来説そのものを捉えかえそうとする野心的な試みがなされたわけではなかった。また、『大系』の刊行以降、同書の底本と「同系」伝本を底本に採用した注釈書が軒並み、『大系』説に引きずられたか、あるいはそれを継承したのか判断が難しいものの、その理解が固定化してしまったようにみえる。このことは『大系』の犯した誤りと同趣の誤謬が後の注釈書に存在することからも窺い知られるであろう。既存の研究成果を踏まえること、および研究史を整理することは極めて重要であるし、基本的な事柄であるとさえ思う。しかし、中長期的な視座から研究史をみやるとき、先行研究群は暫定的な見解に過ぎないから、安易に依拠すべきものではない。ましてや先行論を批判的に読み解き、それらを乗り越えていかねば、研究そのものの意義が喪われてしまいかねない。『狭衣物語』研究は、ただでさえ錯綜する本文群のために通行する注釈書の提供する校訂

本文および解釈に依拠する傾向が強い。このような状況を打破しなければ、研究の進展は望むべくもあるまい。それゆえ、各論者が本文と向き合い、自ら本文読解・分析を行い、その見解を蓄積していくことが『狭衣物語』研究にいま求められていることだと思うのである。

今回注目する「こゑの秋のかせは月みつことしきりなり」は、研究史上、取りあげられることがなかった、いわば検討を放棄されてしまった表現である。本稿は、当該表現の典拠論明に主眼を置くが、その検討過程で出典未詳表現およびその本文の問題についても触れ、他の出典未詳表現の検討[3]を視野に入れた方法論も探るつもりである。出典未詳表現の本文は、意味の取れない場合が多く、そのためか、いくつかのヴァリエーションを獲得しているケースがままある。それゆえ、異文にまつわる本文分析も合わせて行う必要があると考えている。

二、「こゑの秋のかせは月みつことしきりなり」をめぐる文脈の整理

「こゑの秋のかせは月みつことしきりなり」の一文がみえるのは次の場面である。以下、深川本に拠って本文を掲げる。[4]なお、句読を切ったり、清濁を区別したり、鍵括弧を施したりするが、表記は原本のままとする。ただし、「こゑの秋のかせは月みつことしきりなり」の一文は清濁を区別せず、そのまま記す。

○　深川本・巻三・一二五丁表～裏

中将、あふぎに、秋の丶をかきて、かぜいたうふきたるに、もとあらのはぎに露をもげなる、しがらみかくるさをしかのけしきを、をかしくかきないたるをみ給て、「こゑの秋のかせは月みつことしきりなり」とかき給へるはざまに、ちゐさくて、

我かたになびけよ秋の野丶おばなこ丶ろをよするかぜはなくとも

こ丶ろにはしめゆひをきしはぎのえをしがらみかくるしかやなくらん

「いつしかいもに」とかきすさみ給へる、さま〴〵の御ざへども、めもをよばぬに、「これすこしものおぼえん女などの、めとゞめぬはあらじかし」とみえたり。

「中将、あふぎに」とある箇所がやや読み取りづらい。たとえば『全註釈』は「中将が、扇に秋の野を描いて、風がひどく吹いているところに、まばらに生えている萩にいかにも重そうな、（その萩を）足に絡める小牡鹿の気色をしみじみと趣深くなるように描いているのを（狭衣は）御覧になって」（『全註釈』⑦・二六三頁）と読み解いている。[5]しかし、この解釈では、狭衣との会話のさなか、どういうわけか宮の中将が扇に絵を描いていることになる。如何にも不審な解釈である。「中将、あふぎに」は〝中将の扇に〟と読み解き、「かき

ないたるを」は〝かいてある（扇）を〟と「あふぎ」が省略されていると判断し、秋の景物が描かれてある宮の中将の扇を狭衣が見たと解釈しなければなるまい。この解釈が、流布本などの本文世界に通じるものであることは、次に掲げる流布本本文[6]を見れば、つぶさに知られる。

○　承応版本・巻三之下・二五丁表～裏

中将の扇に、秋の野をかきて、風いたうふかせたるに、もとあらの小はぎに露おもげなるを、しがらみふするさをしかのけしきも、おかしうかきなしたるを見給ひて、「声のあき風は月のみつことしきりなり」とかきたまへる、はざまごとに、ちいさくて、

我かたになびけよあきのはなすゝきこゝろをよするかぜはなくとも

心にはしめゆひをきしはぎの枝をしがらみふするしかやなくらん

「いつしかいもが」と書すさひ給ひて、さま〴〵の御ざへといへど、めもをよばぬに、「これは、すこしもの見しらん女などの、めとゞめぬはあらじかし」と見えたり。

なお、「中将あふきに」とあるのは深川本・武田本の二本であり、これを除けば諸本「中将のあふきに」とある。[7]〝中将が扇に描く〟とする解釈は本文の諸相を確認しても見当たらない。

「こゑの秋のかせは月みつことしきりなり」の出典は未詳とされ、いまだよく分からないが、当該本文が置かれる文脈も実は解釈が定まってはいなかったのである。

三、「こゑの秋のかせは月みつことしきりなり」のヴァリアント

「こゑの秋のかせは月みつことしきりなり」の置かれた文脈について前節では整理した。数ある注釈書の中の一部にだが、その解釈に誤りのあることが知られたわけである。だが、その差異の解消が本稿の主眼にあるわけではない。あくまでも「こゑの秋のかせは月みつことしきりなり」の出典を探る点にこそ狙いがある。そこで、以下、当該本文のヴァリアントを確認し、本文の諸相を整理する。なお、本文は既存の研究とは距離を置き、系統ごとに示すのではなく、書写年代ごとにまとめて表示する方法を採る。というのも、これにより検討本文が如何に変容したか、その本文揺動史の捕捉が可能となると考えるからである。

鎌倉期書写本群の「こゑの秋のかせは月みつことしきりなり」に対応する本文を掲げる。[8]

【鎌倉期本文】

①　こゑの秋のかせは月みつことしきりなり――深川本

②　□□の秋風は月のみつことしきりなり（「□」は判読不能字）――保坂本

③　こゑのあきかせは月のみことしきなし――慈鎮本

④　しゑの秋の風は月のみつことしきりなり――為明本
⑤　こへのし秋の風月のみつことしきりなり――松浦本
⑥　呉苑秋風月の水しきりなり――為相本
⑦　ナシ――為家本

本稿における『狭衣物語』本文は主に深川本を用いる。それゆえ、①深川本の本文をひとまずの基準とし、ヴァリアントについて整理する。ただしこのスタンスが〝深川本本文こそ原『狭衣物語』の形を正確に伝えている〟との判断に由来するわけでは決してない。深川本を「最善本」とする理解はいまなお根強くあるのかもしれないが、如上の見解は長谷川佳男および片岡利博の論稿からも明らかなように支持できるものではない[9]。本稿で、深川本を取りあげることへの誤解なきよう、記して注意を促しておく。

以下、本文の諸相について確認する。②保坂本は深川本「こゑ」とあった二字に相当する本文を欠く。この箇所には「こゑ」「しゑ」「こへのし」「呉苑」といったヴァリエーションが認められるから、保坂本の欠字部がどのような形であったか確定できない。

③慈鎮本に「こゑのあきかせは」とあるのは①同様だが、「月のみことしきなし」と続く点に違いがある。この「月のみことしきなし」では意味がうまく取れない。「月のみつことしきりなり」から「つ」と一つ目の「り」が落ちたか。「なし」とあるのは「なり」の「り」を「し」に書き誤ったのであろう。

④為明本の「しゑの」は、これでは意味をなさず、損傷を疑わざるを得ない。「こ（己）」と「し（之）」の字形類似による誤写が予測される。

⑤松浦本は「こゑの」が読み解けなかったのか、「し」を加えたうえに「ゑ」を「へ」に変え、「こへのし」なる本文を作る。しかし、「こへのし」が何を意味するかは不明である。損傷していると考えるべきであろう。

⑥為相本は「こゑの」とある箇所を「呉苑」と漢字で表記する。「こゑの」を「ごゑんの」の撥音を無表記としたものであると判断したか、あるいは「こゑの」と「月」が共起することから『和漢朗詠集』落葉に採られる、後中書王の「逐夜光多呉苑月　毎朝声少漢林風（夜を追って光多し呉苑の月　朝毎（あしたごと）に声少なし漢林の風）[10]」を連想し、「呉苑秋風月（の水しきりなり）」との表記を生じさせた可能性などが考えられもするが、いずれの場合に因る異同なのか詳らかにできない。他の鎌倉写本群が仮名で表記する中、「呉苑」と漢字で記し、解釈を限定するが如き表記を取る向きが存在したという事実は本文史上無視できるものではない。

最後に、⑦為家本についてだが、同本は当該本文を有しない。この状態は当該本文を持たない本を親本としたことに因ると思しい。「こゑの秋のかせは月みつことしきりなり」があったと疑われる箇所に「★」を私に施したうえで、為家本

本文を掲げ、説明しようと思う。

○　為家本・巻三・一二九丁表～一三〇丁表

中将のあふぎに、秋の野をかきて、風いたくふかせたるに、もとあらのこはぎに露おもげなる、しからみかくるさおしかの気色、おかしくかきないたるをみ給て、★かい給えるさまにちゐさくて、

我かたになびけよあきのはなすゝき心をよするかぜはなくとも

心にはしめゆひをきしはぎのえをしがらみかくるしかやなくらん

「いつしかいもに」とかきすさみ給える。さま〴〵の御ざえども、めもをよばぬに、「これすこし物おぼえん。女などの、めとゞめぬはあらじかし」とみ給。

為家本の叙述では「かい給える」の目的語が記されておらず、言葉足らずな感がある。少なくとも、中将の扇に描かれた秋の景物を見て、狭衣は〝何か〟を書いたことは間違いない。この〝何か〟が諸本では「こゑの秋のかせは月みつことしきりなり」に相当するのである。為家本本文は目的語を欠いており、このままでは解釈できない状態である。そのうえ、目移りが疑われる文字列もなく、当該本文の字数分に相当する空白も有しない。それゆえ、為家本が「こゑの秋のかせは月みつことしきりなり」を持たないのは、同本の親本の段階で既に当該本文が無く、その状態を継承したためと予測される。

次は室町期以降の本文群からいくつか取りあげ、その諸相を整理しておこうと思う。[11] ただし、室町期・近世期伝本はおびただしい数あり、その全てを参照することは現実的ではないから、特徴的なヴァリアントを『校本狭衣物語　巻三』（三九八頁）および適宜影印等を確認し、まとめる。なお、掲出しなかった伝本も数多いが、以下に示すヴァリアントの中にいずれもほぼ収ることを確認している。

【室町期・近世期本文】

①　すこしの秋風八月の夜にしきり也――京大五冊本

②　こしのあきかせ八月のみつことしりきなり――内閣本

③　このゑの秋かせは月のみつとしるきなり――紅梅文庫本

④　声のあき風は月のみつことしきりなり――承応版本

⑤　ナシ――蓮空本・九大細川本

①京大五冊本は「すこしの秋風八月の夜」とある点が異なる。「すこしの」とあるのは「こゑの」では意味が取れず、何とか読み解こうと苦心した末、これを「こしの」を誤ったものと判断したうえで「す」を加え、「すこしの秋風」との解釈に至ったことに因るものか。「夜にしきり也」との異同も認められるが、これは先に確認した為相本のごとく「水しきりなり」とあった本文を書き誤ったことで生じたヴァリア

ントであろう。たとえば蓮空本とその転写本である四高本の間で【水】と【夜】の誤写例が報告[12]されているように、その草書体は書き誤られやすいもののようである。したがって、京大五冊本における「夜しきり也」との異文が誤写から派生したとの想定は充分あり得る。なお、「秋風八月」とあるのは「は」の字母が「八」とあった親本を利用したか、あるいは書写者の書き癖のために「は（八）」を「八」としか読めない字で記してしまったことに因るか。このように判断すれば、当該本文は損傷していると考えねばならないが、「すこしの秋風八月の夜にしきりなり」との異文は、僅かな秋風が八月の夜に頻りに吹いたと読み解くことができ、安易に損傷本文であると言い切れない。ここに京大五冊本独自の本文世界を認める必要があるかもしれない。

②内閣本は「こしのあきかせ八月のみつことしりきなり」とある。「こしの」は「こゑ」の「ゑ（恵）」を「し（志）」と誤写したことで生じたか。「八月のみつこと」が「しりきなり」とある点、このままでは解釈できない。「八月」とあるのは①京大五冊本と同様の要因が考えられる。「しきり」の語順が逆転しているのは、書写のさい語順が入れ替わってしまったのであろう。③紅梅文庫本は「このゑの秋かせは月のみつとしるきなり」とある。「このゑの」および「しるきなり」では意味をなさない。「このゑ」は「近衛」などと漢字を宛てることもできるが、それでもその意味はよく分からない。「こゑの」をめぐる理解が定まっていないことで生じた異文と考えられる。「しるきなり」は「しきり」の語順が逆転したうえに「り」と「る」が書き誤られたと思しい。

④承応版本は「声のあき風は月のみつことしきりなり」とあって、「こゑの」を「声の」と表記する。漢字表記という観点からいえば、「呉苑」とあった為相本との違いが鮮明である。如何なる要因で「声」と漢字を宛てたのかは現時点で詳らかにし難いが、そこにヴァリアントが生まれる力あるいは本文の動態を看取することができるかもしれない。この点に関する検討は、今後の課題としたい。

⑥蓮空本は当該本文を有しない。先述した為家本と同様の事由により備えないと予測されることは、次の本文をみれば明らかである。

○　蓮空本・巻三・一七二頁

中将の扇に、秋の野をかきて、風いたくふかせたるに、もとあらの萩に露をもげなるを、しがらみかくるさをしか、けしきおかしくかきなひたるをみ給て、★かき給へるはざまにちいさくて、

わがためになひけよ秋のしのすゝき心をよする風はなくとも

心にはしめゆひをきし萩のえをしがらみかくるしかやなからん

「いつしかいもに」とかきすさみ給へる、さま〳〵の御

まへどもめもをよばず、「これをすこし物思らん女などの、めとめぬはあらじかし」とみ給ふ。

ここまで鎌倉期から室町期・近世期本文の確認をつうじて「こゑの秋のかせは月みつことしきりなり」の諸相を整理してきた。それらをみるかぎり、当該本文が本文史上、大きく揺れ動かないものであったと知られる。もちろん、ヴァリアントの中には京大五冊本のように独自の物語世界を形作っている可能性の拭いきれないものが存在することは注意せねばならない。

四、「こゑの秋のかせは月みつことしきりなり」の典拠

「こゑの秋のかせは月みつことしきりなり」の諸相を確認したが、その典拠について考えるにあたって参考になるかと思われるのは、やはり「呉苑秋風」との表記例を有する為相本であろう。承応版本も「声の秋風」と漢字を宛てるが、これは問題にならない。というのも、漢詩句は七言詩であれば二字・二字・三字（あるいは四字・三字）で語句を句切ることができるし、五言詩では二字・三字で句切るのが一般的である。だが、承応版本の本文は七言詩および五言詩の訓み方、そのいずれにも合わないのである。その一方で、為相本表記は「呉苑秋風」とあり、「呉苑」「秋風」と二字・二字で句切ることができる。つまり、七言詩の一節であると推定できるのである。七言詩の一節であるとの見通しが立てば、典拠として指摘しうる詩句も相当に絞られてくる。それこそ、『狭衣物語』以前に成立した『千載佳句』や『本朝麗藻』などの七言詩を収める漢詩集は調査が必要となる。そこで［呉苑＋秋風］の用例を上述の資料から捜すと、『千載佳句』に、次に掲げる晩唐・許渾の「題武丘僧院」の一節を見つけることができた。いま『千載佳句』諸本の中でも最古写本（鎌倉期写）と目される歴博本を用い、その本文を掲げる。[13] なお、当該本に付された訓点を基にする私訓を丸括弧内に入れて示す。

○　国立歴史民俗博物館蔵本『千載佳句』・上巻・一五丁裏・秋夜・一六三

荆溪夜雨花飛疾　（荆溪の夜雨は　花飛ぶこと疾（はや）し）
呉苑秋風月満頻　（呉苑の秋風は　月満つこと頻りなり）

摘句される詩句の一節「呉苑秋風月満頻」は「呉苑の秋風は　月満つこと頻りなり」と訓むことができる。[14] その本文をみるかぎり、「呉苑秋風」は為相本の表記と一致するし、「月満頻」が「月みつことしきりなり」とあった諸本本文と同様に訓み下せる点、注目せられる。右の許渾詩句と「こゑの秋のかせは月みつことしきりなり」の一致度を思えば、当該詩句を典拠として認めてよいと私は思うのだが、軽々に結論づけるわけにもいくまい。そこでいま一度、「こゑの秋のかせは月みつことしきりなり」の置かれる文脈を整理したうえで、掲出許渾詩句を典拠と認めうるか考えていきたい。

「こゑの秋のかせは月みつことしきりなり」と記した扇は、

「秋の丶をかきて、かぜいたうふきたるに、もとあらのはぎに露をもげなる、しがらみかくるさをしかのけしきを、をかしくかきないたる」（深川本）ものであった。「呉苑秋風」とある箇所は地の文中の「秋の丶をかきて、かぜいたうふきたるに」と合致する。また、宮の中将とのやりとりは夜であったから、「秋夜」に配列される許渾詩を狭衣が扇に書き付けたとしても、その行為はむしろ当意即妙ですらあり、不審があるとは言い難い。――狭衣が、秋の景物が描かれた扇に「秋夜」のことを詠うと理解される許渾詩を書いたと解釈することに問題はないのである。この「呉苑秋風月満頻」は〝呉苑の秋風は吹き渡り、月は幾度も満ちていく〟などと読み解かれる詩句であり、時の経過をいうものと思われる。この点、「いつしかいもに」とあったことと関係するか。また、秋の景物と当該詩句の「はざまに、ちゐさく」記した和歌「我かたに」歌の結句が「風はなくとも」とあるのは、呉苑には風が吹くけれども、私のいるこの場には風が吹かない、といったことを言わんとしたものか。このように許渾詩を引く当該表現が後続本文の理解に影響していると見るべき事例もある。

「こゑの秋のかせは月みつことしきりなり」の典拠は許渾「題武丘僧院」の一節であると判断しても、その文脈上、問題ないことは明らかである。

五、おわりに

ここまで「こゑの秋のかせは月みつことしきりなり」の典拠について検討を加えてきた。その結果、同表現の典拠は『千載佳句』収録の許渾詩句であるとの見解を得た。この『千載佳句』は『和漢朗詠集』成立に絶大な影響を与えた佳句集である。『和漢朗詠集』との間に共有する詩句も多い。それゆえ、『狭衣物語』における漢詩句を引用する表現の典拠を探るうえで、『千載佳句』は当然参照される資料として位置づけることができる。しかし、『狭衣物語』研究史上、『和漢朗詠集』ばかりに視線が注がれ、『千載佳句』をはじめとする他の本朝で編まれた漢詩集を検討する視座が欠けていた。それゆえに、たとえば『新全集』や『全註釈』のごとく『千載佳句』の書名を出しておきながら、「こゑの秋のかせは月みつことしきりなり」の典拠を「出典未詳」とする注釈書などが出現してしまったのであろう。もちろん、『狭衣物語』における漢詩句引用のほぼ全てが、大谷雅夫が出典未詳表現の典拠を『本朝麗藻』所収詩であると明らかにした事例[15]を除けば、『和漢朗詠集』所収詩であるから、如上の状況にも一応の理解を示すことはできる。だが、だからこそ、各研究者は『和漢朗詠集』ばかりを検討してきた研究史を批判的に見つめ、さまざまな資料を調査しなければならなかった。どれほど詳密な注を完備したテキストであろうと、その理解は刊行時点にお

ける見解に過ぎない。「こゑの秋のかせは月みつことしきりなり」が長らく出典未詳表現であり続けたのは、研究者らの他人任せな研究態度に因るところが大きいと思えてならない。

『狭衣物語』本文は錯綜している。この理解を否定するつもりはない。だが、片岡利博による一連の本文研究[16]において示されたように、おびただしいヴァリアントは資料にこそなれ、研究上のネックとなるものではないのである。出典未詳表現や意味不通本文のみならず、作品読解を試みるうえで、本文の諸相、および変容過程の輪郭を読み取ること――本文揺動史の把握を行う必要があるだろう。いま支持される本文理解を捉えかえすためにも、我々は改めて本文の有り様を直視しなければならない。

【注】

（1）本稿では、以下に示す注釈書を確認している。以下、略称に続けて書名を記す。『有朋堂』――『有朋堂文庫』（有朋堂書店、大正一〇年）。『全譯』――吉澤義則『全譯王朝文学叢書　狭衣物語下』（全譯王朝文学叢書刊行会、大正一三年）。『大系』――三谷榮一・関根慶子『日本古典文学大系　狭衣物語』（岩波書店、昭和四三年。第三刷）。『全書』――松村博司・石川徹『日本古典全書　狭衣物語下』（朝日新聞社、昭和四二年）。『集成』――鈴木一雄『新潮日本古典集成　狭衣物語下』（新潮社、昭和六一年）。『新全集』――小町谷照彦・後藤祥子『新編日本古典文学全集　狭衣物語2』（小学館、平成一三年）。『全註釈』――狭衣物語研究会編『狭衣物語全註釈Ⅶ　巻三（下）』（おうふう、平成二五年）。

（2）上原作和・伊藤禎子・勝亦志織「平安後期物語引用漢籍総覧――『浜松』『寝覚』『狭衣』編――」（『懐風藻研究」第九号、平成一二年五月）および上原作和「『狭衣最秘鈔』――『狭衣物語』引用漢籍註疏稿――」平安文学論究会編『講座　平安文学論究』第十六輯（風間書房、平成一四年）。

（3）いまなお出典未詳表現として、その解明が俟たれるものに巻一にみえる「一すにみてり」「をとはの山には」「めくりくる」といったヴァリエーションを備える例がある。当該例についての検討は稿を改めて行う。

（4）吉田幸一編『古典聚英　狭衣物語下〈深川本〉』（古典文庫、昭和五七年）に拠る。以下、深川本本文はすべて同書に拠って掲げる。

（5）『新全集』の解釈は『全註釈』と同様である。深川本を底本とする注釈書間でその本文理解が継承されていると思われる。

（6）本文は、三谷榮一『平安朝物語板本叢書2　狭衣物語（下）』（有精堂、昭和六一年）に拠る。

（7）中田剛直『校本狭衣物語　巻三』（桜楓社、昭和五五年）を利用した。なお、松井本には「中将のけふきに」とあって「け」をミセケチとした上で「あ」を書き加える異同があるものの、私解を否定するものではない。

（8）深川本を除く、本稿で参看した鎌倉写本は以下のとおりとなっている。伝本名を掲げたのち、その出典を記す。保坂本・慈鎮本・為明本――『狭衣物語諸本集成』（笠間書院）。為秀本――『静嘉堂文庫蔵物語文学書集成』（雄松堂マイクロフィルム）。松浦本――天理大学附属天理図書館デジタルプリント。為相本――紙焼

き写真。為家本――『古典聚英　為家本』（古典文庫）。

（9）長谷川佳男「巻一、第一群と第三群の関係――構造的本文批評の試み――」（同『平安朝物語・本文の科学』笠間書院、令和二年三月。初出は昭和六三年）、片岡利博『異文の愉悦　狭衣物語本文研究』（笠間書院、平成二五年）収録の一連の論稿。

（10）引用は、菅野禮行『新編日本古典文学全集　和漢朗詠集』（小学館、平成一一年）に拠る。

（11）ヴァリアントの確認には主に『校本狭衣物語』を用いたが、影印を確認できた伝本については、そのかぎりではない。以下に示す伝本は別途本文を確認している。略称に続けて、その出典を示す。京大五冊本・内閣本――紙焼き写真。紅梅文庫本――『狭衣物語諸本集成』（笠間書院）。承応版本――三谷榮一『平安朝物語板本叢書2　狭衣物語（下）』。蓮空本――『古典文庫』（古典文庫）。

（12）美谷一夫「金沢大学図書館蔵（四高本）「さころも」について（一）」（『学葉』三六巻、平成六年一二月）において、既に【夜】と【水】の誤写例が指摘されている。

（13）引用は『国立歴史民俗博物館蔵貴重典籍叢書　文学篇第一一巻（漢詩文）』（臨川書院、平成一三年）に拠る。

（14）『千載佳句』に採られる許渾「題武丘僧院」の詩句は頷聯のみであり、その全容は記されていない。それゆえ、許渾の詩集『丁卯集』に拠って当該詩全体を掲げることとする。引用は『丁卯集』（台湾中華書局、昭和四三年）を利用し、返り点は私に付し、頷聯には網掛を施す。なお、『全唐詩』巻五三四、『文苑栄華』巻二三〇にも当該詩は収録されているが、そこには若干の異同が認められる。『全唐詩』には「花開一作飛疾」とあり、『文苑栄華』には「花飛疾」とあること、申し添えておく。

題二蘇州武丘寺僧院一

暫引二寒泉一濯二遠塵一　此生多是異郷人
荆溪夜雨花発疾　呉苑秋風月満頻
万里高低門外路　百年栄辱夢中身
世間誰似二西林客一　一臥二煙霞一四十春

（15）大谷雅夫「道をうづむ花」（『歌と詩のあいだ』岩波書店、平成二〇年）。

（16）注（9）掲出片岡著書に同じ。

【附記1】
本稿は日本学術振興会特別研究員研究奨励費（課題番号・19J11542）の助成を受けた研究成果の一部である。

【附記2】
昨年、急逝なされた加藤洋介先生のご霊前に本稿を謹んで捧げます。先生のご冥福を改めてお祈り申しあげます。

（こばやし・ただまさ　本学博士後期課程）